

NPO

## 震災で唯一良かったことは、 一番大事なことがわかったこと。

仙台市

木下 牧子、岡 菜実 ACT53 仙台 事務局メンバー

取材日 2011.8.25

「100人のうち"53"人(半分以上)の人が変われば世の中は変わる、変わりたい」。そんな願いを込めて、「53」(=ごみ)について知恵やアイデアを出し合い、積極的に"ACT" (=行動) しようと発足した。震災後は被災された方が元気になるように、使う人も元気になるように、被災女性による手縫いの「げんき雑巾」販売のとりまとめ役を担う。

### 3月11日 14時46分

【岡さん】 実家の近くで買い物中だった。店員さんが誘導してくれたためさほどの混乱はなく、私は犬をつなぐゲージにつかまっていた。両親のことが心配だったので、カートにマイバスケットを置きっぱなしにして実家へ向かった。行ってみると心配したほどの被害はなくて安心した。

【木下さん】 工作中だった。病院の受付におり、どうしようと患者さんと抱き合っていた。もちろん診察は即刻中止だ。

近くの原町小学校が避難所になったので、夕方には先生と一緒に避難所へ往診に向かった。それからは1カ月、子どもたちと一緒に食事の手伝いなどに毎日避難所へ通った。

自宅では電気は月曜日に復旧、火曜日に水道が出た、ガスは1カ月以上かかった。水道の復旧は早かったが、下水が壊れたためにお風呂に入れたのはゴールデンウィークのことだった。

【岡さん】 電気は3-4日、水道は10日程かかった。近所のコミュニティーセンターで水が出たので、水はそこへ汲みに行った。実家の両親はとても水汲みに行けない。ガソリンがあるうちはまず実家の分を汲んで車で運び、帰りに自分の家の分を汲んで帰った。両親宅は水道の復旧が遅かったため、その後しばらくは水をリュックに入れて背負い、バスで通う日々が続いた。だいぶ遅くなってから、災害ボランティアが水汲み代行もしていると知った。お願いすると若い人が自転車に来て、私の何倍もの水を一挙に運んでくれた。ありがたかったが、母は「もったいなくて使えない」と、少しずつしか使わなかった。ガスは1カ月くらいで復旧した。大阪ガスの方が夜中の2時過ぎまで暗がりの中で作業をしていて、もう本当にありがたく思った。

石油ストーブとカセットコンロは常に使っていたので調理に困ることはなかったが、鍋でご飯を炊こうとして焦げ付かせてしまった。電気が入った時には電気はありがたいものだと思った。



### 避難所となった原町小学校

【木下さん】 震災当日は3,000人が避難していた。毛布は200枚しかない。真っ暗な中に階段に座って寝る人もいる状況だった。廊下も歩くところがないくらい、教室も体育館もぎゅうぎゅうで、あふれた人は校庭で一晩を過ごした。

翌日の朝、45号線には「気仙沼」「唐桑」と書いた紙を持った人がたくさん立っていた。避難所の人数は2,000人になり、その後2週間くらいは1,000-700人ほど。最終的には百何人かになり、4月7日に解散式が行われた。別れたその日に、震度6強の余震が起こった。この余震で家の3階のものはすべて倒れ、寝泊まりしていた3階の部屋は誰も行きたくないと言い、未だに2階の一部屋に固まって雑魚寝をしている。

### 個人のつながりから広がる支援の輪

震災直後は正直目の前のことでいっぱい、会として動くのはなかなか難しかったこともあり、それぞれできることをすることにした。最初は、子どもたちの文具を集めているところがあるという情報がメールで届いた。そこで呼びかけをはじめたところどんどん集まったが、届ける予定だったところはもう満杯でいりませんと言われてしまっ

た。さてどうしようかと悩んだ折、ACT53 仙台代表のご主人が「凧の会」の活動で、避難所で子どもたちと凧を飛ばして遊ぶ活動をしているという。そこで避難所へ行く時に文具を届けてもらうことにした。また、NPO 法人水守の郷の海藤さんが南三陸の方へ頻繁に行っていたので、集まった文具を託して届けてもらっていた。

七ヶ浜にいる友人からも衣類などが欲しいと連絡がきた。次第に「欲しい」とリクエストがあった情報を発信して集める、欲しい人達に送る、中継活動にシフトしていった。欲しいものと集まってくるものがマッチングしないこともある。大量に物を集めて送るのは大きな団体に任せ、欲しいと言われたものが届くよう、小さく活動をしていた。

## 避難所から生まれた「げんき雑巾」

ACTの事務所の並びに事務所を構えている団体のスタッフが、自身も津波で家が流され職場で生活している。そのスタッフから、知り合いが避難所で届いたタオルを縫って雑巾を作っているの、その雑巾をどこかで使ってもらえないかと相談が寄せられた。プレゼントするのもいいが、どうせだったら買い上げようと思っているという話だった。それなら縫った方たちにお金がまわるようにしたいと発案すると企画を任せられ、生まれたのが「げんき雑巾」だ。3枚1セット500円で販売し、300円は縫った人に報酬としてお渡しする。活動を始めるとどっさりタオルが届いたが、肝心の縫う人がいない。避難所を移転していき、あるいは仮設に入り、行方がわからなくなってしまうからだ。縫ってほしいと思って宣伝しに行けば「お金の絡むことをやってもらっては困る」と避難所を管理している人から拒まれ、なかなか縫う人が増えなかった。そんな中、最初に物品を届けた七ヶ浜の友人が個人的に声がけをしてくれた。声をかけた先でグループができ、町内会で参加したいという声もあり、今は県内100人程が参加してくれている。5,000枚を目標にしたが、あっという間に突破する勢いで雑巾が縫い上がっている。そこで、10,000万枚に目標を変更した。ACTとしては10,000万枚でこの活動をストップしようと思っている。

雑巾にはハートやクマなど柄入りのものもある。皆さんすぐく楽しんで縫ってくださっている。手を動かすことは本当に癒しになると思う。被災して何もする気が起きなかった方が、縫うことが生きがいになって途中で「卒業したい。私はやりたい手芸をしたい」と仰ったり、「母の顔に笑顔が戻りました」というお手紙も届いた。あるグループは、「報酬」を皆でためて焼肉を食べに行くことを目標にして取り組んでくださっている。仮設に入った方から、避難所の皆と別れて寂しいので



ACT53 仙台で販売中の「げんき雑巾」

また雑巾を縫いたいと連絡が入ることもある。買ってくださった方からは、ハートの雑巾が出てきて心がなごんだと声が届いた。喜んでくださっていることを伝えると、またそれは皆さんの励みとなり、これはどこに行くんだろうねと言いながら縫っているそうだ。遠くは九州や北海道など、全国に旅立っている。

## げんきのタグ

熊本在住の石川健次さんに書いていただいた。緑内障・白内障による合併症で視力を失いながらも絵手紙などを書いている方で、このために書いてくださった。

できあがった雑巾には石川さんに書いていただいた「げんき」タグを縫いつけている。このタグつけボランティアは現在のべ16名。お手伝いして下さる方を募集している。

## 震災を振り返って

**【木下さん】** 減らせること、なければならぬで暮らせることを実感した。震災直後は皆夜が早かった。夜にコンビニがあいていなくても大丈夫だし、用事はすべて午前中に済ませて午後は家にいる生活が続いた。とても省エネだったと思う。大変だったし、未だに大変な思いをしている方はたくさんいるけれども、皆家族や隣の人との絆など、一番大事なものがわかったと思う。

**【岡さん】** 行動力のある人はすごいと思う。ボランティアの活動はありがたい。

**【木下さん】** 震災があつて家族が集まり、逆に家族が離れ離れになった家庭もある。どんなに家族が一緒にいることが大事なのが分かったと思う。悪かったことは数えたらきりが無いけれど、一番大事なことがわかったことは、震災で唯一良かった事だと思う。